

Introductiones Parisienses

著者不明

Last-Modified: 2020/5/29

西牟田祐樹 訳

第二章までの部分訳である。底本はL.M. de Rijk, *Logica Modernorum: a Contribution to the History of Early Terminist Logic: Vol II - Part II*, Assen: Van Gorcum, 1967 (pp.357-373)を使用した。角括弧は訳者による付加である。

導入

導入(introductio)とは何らかの技術についての簡潔で明確な説明である。導入とはそれ[導入]を用いることでより容易な物事によってより困難な物事に着手すべきところのものである。 *introductio*はあたかも*ductio intro*(内へと導く)のように言われる。つまり、導入は何かのうちに導くものであり、明らかに技術の内に導くものである。

弁証論とは言論の技術あるいは偽である物事から真である物事を区別する技術、あるいは尤もらしくない物事から尤もらしい物事を区別する技術である。またはアウグスティヌスが言うように弁証論は技術についての技術、知識についての知識であり、そのようにあることが必要である。*dialetica*(弁証論)は[ラテン語で]*duo*である[ギリシア語の]*dia*と[ラテン語で]*sermo*である*logos*あるいは[ラテン語で]*ratio*である[ギリシア語の]*lexis*からそのように呼ばれる。*dialetica*は*dualis sermo vel ratio*(二つの言葉、あるいは論拠)と同様の意味である。あるいは*dualis sermo vel ratio*は*disputatio*(論争)である。*dialectica*は二人の対立者の間にある。*dialetica*は*diversorum putatio*(対立する考察)とも言われる。

技術とは目的が同じである諸原理の集まりである。諸原理には規則、格率、ロクス(*locus*)、教訓がある。規則(*regula*)とはそれによって技術者自身を技術において導く(*regit*)のものであると言われる。原理(*principium*)とは第一のもの(*primum*)であり、格率(*maxima*)とは技術において最大の(*maximam*)必然性をもつものであり、よく知られているものである。ロクス(*locus*)とは技術全体がロクスの上に置かれる(*locatur*)ものであり、[技術全体が]ロクスの内で形成されるものである。教訓(*preceptum*)とは教え

ねばならない物事について技術自体において何を避けるべきであり、何に従うべきであるかを教える(precipit)ものである。

Ars(技術)は‘arto, artas’(制限する)あるいは‘artor, artis’(制限される)に由来してそのように呼ばれる。なぜなら技術は自身の探求分野を制限するからである。‘artor, artaris’については技術は規則あるいは格率によって制限されるからである。

弁証論は項辞と命題と論証からなる。全ての項辞は音声であり、全ての音声は音響である。最初に音響、いわばより先のものから始められねばならない。

音響について

音響とは耳に固有な可感的なもの、つまり耳によってのみ感覚されるもののことである。音響の内、あるものは音声であり、あるものは音声ではない。音声でない音響は例えば足音などである。音声である音響は動物の口から発せられたものである。また次のように説明される。音声である音響はわずかな空気を舌で打つ、つまり舌を回転させることによって空気を打つ時に形成されるもののことである。

音声について

音声の内あるものは意味表示的であり、あるものは意味表示的ではない。意味表示的なものは例えば「人間」であり、意味表示的でないものは例えば「ブバ」(buba)である。意味表示的なものの内、あるものは自然によって意味表示的であり、あるものは規約によって意味表示的である。自然によって意味表示的であるものは自然によって生じるところのもののことであり、例えば病人の呻き声やその類のものがそうである。規約によって意味表示的であるものとはつまり人間の意志によって表示作用するもののことである。規約によって意味表示的なものの内であるものは語であり、あるものは言表である。語の内であるものは名辞であり、あるものは動詞である。

名辞について

名辞は次のように説明される。名辞とは規約によって時制を伴わず表示作用する音声であり、そのいかなる部分も部分である限り付加的に表示作用しないもののことである。「表示作用する」は表示作用しない音声との種差のために付加される。「規約によって」は自然的に表示作用するものとの種差のために付加される。「時制を伴わず」は時制を伴う動詞との種差のために付加される。「そのいかなる部分～云々」は言表との種差のために付加される。言表の諸部分はそれ自体で表示作用するからであ

る。「限定で」は不定名辞との種差のために付加される。不定名辞は論理学者によれば名辞(nomen)ではない。不定名辞であるいかなる語も名付けない(nominat)からである。「正格で」は斜格の名辞との種差のために言われる。そして論理学者によれば斜格の名辞は名辞ではない。いかなる斜格の名辞も正格[の名辞]を伴っても、ましてや斜格[の名辞]を伴っても名付けることはないからである。

動詞について

動詞とは規約によって時制を伴って表示作用する音声であり、そのいかなる諸部分も独立した部分である限りそれ自身では表示作用しないもののことである。それぞれの[動詞の説明規定の]部分に置かれているところのものについては名辞の説明規定から明らかである。

言表について

言表とは規約によって表示作用する音声であり、その部分がそれ自体で何かを表示作用するもののことである。部分「時を伴い」または「時を伴わず」は[説明規定の内に]置かれない。ある言表は時制を伴わずに表示作用し、ある言表は時制を伴ってに表示作用するからである。「不定正格で」も[説明規定の内に]付加されない。いかなる言表も不定となることも格によって屈曲することもないからである。

その内に完全な動詞が置かれている言表は例えば「人間は白い」である。

同様に、言表の内であるものはそのうちに直説法の動詞が置かれているような直説法言表であり、あるものは命令言表であり、あるものは嘆願言表であり、あるものは祈願言表であり、あるものは接続言表である。直説法言表とはその内に直説法動詞が置かれているもののことである。直説法言表のみが命題である。なぜなら直説法言表は音声自体のみの力においてあるからである。命題の部分は項辞(termini)と呼ばれる。項辞はそれ自体を境界づける(terminant)、つまり限定するからである。狭義の意味では項辞とは命題の主語部分あるいは述語部分であり、広義の意味では項辞とは言表の全ての部分である。

I 命題について

正確に言えば、命題とは真または偽を表示作用する言表のことである。命題の内あるものは肯定であり、あるものは否定である。肯定命題とはそれにおいて主繋辞が肯定されているもののことである。例えば「人間は動物である」と言われる時がそうである。否定命題とはそれにお

いて主繫辞が否定されているもののことである。例えば「人間は走らない」と言われる時がそうである。

同様に、命題の内であるものは定言であり、あるものは仮言である。定言命題とは主語等を持つもののことである。例えば「人間は動物である」がそうである。同様に命題の内あるものは明示的であり、あるものは暗示的である。明示的なものは例えば「人間は走るものである」がそうであり、暗示的なものは例えば「人間は走る」がそうである。

‘omnis’(全て)、‘nullus’(いかなる～ない)のような他の部分は共範疇語(sincategoreumata)と呼ばれる。[ラテン語で]‘con’である[ギリシア語]‘sin’と[ラテン語で]‘significatio’である[ギリシア語]‘goreuma’に由来してそのように言われる。sincategoreumataはconsignificatio(共意味表示)と同様の意味である。

共範疇語の意図(intentiones)はその項辞だけでは決定されず、他の項辞を伴って決定される。

Categorica(定言)は[ラテン語では]predico,predicasである‘categorizo, categorizas’に由来してそのように言われる。categoricaはpredicativaと同様の意味である。predicare(述語づけること)とquod precedenti copulare(より先のものと結合すること)は同じである。

その諸部分が[複数の]命題である時、ある命題は仮言命題(ipotetica)である。例えば「もし人間があるならば、動物がある」(si homo est, animal est)がそうである。ipoteticaは[ラテン語で]sub conditioである‘ipotesi’に由来してそのように呼ばれる。ipoteticaはconditionalisと同様の意味である。このような理解の仕方ではそれにおいて‘si’(もし～ならば)またはその類いのものが置かれている命題のみが仮言命題である。ipoteticaを[ラテン語で]subである[ギリシア語]‘ypo’と[ラテン語で]positioである[ギリシア語]‘tesis’に由来してそのように呼ぶ者もいる。このような理解の仕方ではそれにおいて一つの物事が別の物事に後続するような全ての命題が仮言命題である。つまり‘si’, ‘quia’, ‘dum’, ‘quando’のいずれかによって[結合されるもの]である。

命題の内あるものは単数であり、あるものは複数である。複数[命題]とはそれにおいて複数の肯定、あるいは複数の否定、あるいは単数の肯定と単数の否定が置かれている命題のことである。あるいは、複数のものが一つのものの述語になる、または一つのものが複数のものの述語になる、または複数のものが複数のものの述語になる時に、複数のものから一つの実体が生じないような命題は複数であるという。例えば「これは白い文法学者である」、「この白い文法学者は人間である」、「もし人間であるならば、ロバではない」などがそうである。単数命題とはそれにおいて一つのもものが一つのものの述語であるもののことである。例えば「人間は動物である」がそうである。

同様に、定言命題の内であるものは全称であり、全称命題とはその内で全称記号で限定された共通項辞が主語となっている命題のことで

ある。例えば「全ての人間は動物である」という時がそうである。全称記号はそれによって付加された項辞が全称性を代表する、つまりその名(appellatis)の全称性を代表することを表示作用するものとも言われる。全称記号は‘omnis’、‘nullus’、‘neuter’、‘quilibet’、‘alteruter’とその類いのものである。

[定言命題の内]あるものは特称命題であり、特称命題とはそれにおいて特称記号あるいはそれに類したもので限定された共通項辞が主語となっている命題のことである。例えば「ある人間は走る」がそうである。特称記号は付加された項辞が特称性を代表することを表示作用することとも言われる。特称記号は‘quidam’、‘aliquis’、‘alter’やその類いのもののことである。

[定言命題の内]あるものは不定命題であり、不定命題とはそれにおいて何らかの項辞によって限定されていない共通項辞が主語となっている命題のことである。例えば‘Homo currit’ (人間が走る)がそうである。不定命題はそれによって音声自体のみの力においてあり、主語が何かあるいは全てを代表するかについての理解が与えられないものとも言われる。

[定言命題の内]あるものは単称命題であり、単称命題とはそれにおいて固有項辞あるいは指示代名詞が主語となっているもののことである。例えば「ソクラテスが走る」と「その者が走る」がそうである。単称命題は何らかの他の説明なしには存在を表すのではなく述定を表すようなものと言われる。

命題の性質について「何であるか」と問われたならば¹、定言命題または共通する質を持つ仮言命題[と答えられる]。定言命題とは述定のことであり、同様に仮言命題とは帰結関係のことである。共通する質を持つもの²について「どのような質か」と問われたならば、[肯定または否定と答えられる。]肯定と否定は述定であり、肯定と否定のどちらか一方のみが当てはまる。共通する量を持つものについて「どのような量か」と問われたならば、[全称、特称、不定、または単称と答えられる。命題の]量は定言命題では主語の接尾辞の量と一致する。

これらのことは次の詩句により明らかである。

何であるか 定言または仮言
どの質か 否定または肯定
どの量か 全称、特称、不定、単称

定言命題の内であるものはいかなる項辞も共有しない。例えば「ソクラテスが走る」と「プラトンが読む」がそうである。あるものはある項辞を共有する。例えば「ソクラテスは読む」と「ソクラテスは走る」、

¹底本注: locus corruptus esse videtur.

²仮言命題の場合で前件と後件の質が異なる場合を除外するためにこのような限定が付け加えられていると解釈する。量についても同様である。

同様に「ソクラテスが走る」と「プラトンが走る」がそうである。何らかの項辞を共有するものの内であるものは前述のように一方の項辞のみを共有する。あるものは両方の項辞を共有する。両方の項辞を共有するものの内であるものは同じ順序で共有し、あるものは逆の順序で共有する。同じ順序で共有するものの内であるものは反対対当であり、あるものは小反対対当であり、あるものは大小対当であり、あるものは矛盾対当である。反対対当とは全称肯定と同じ主語と述語の全称否定である。例えば「全ての人間は走る」－「いかなる人間も走らない」がそうである。小反対対当とは全称肯定と同じ主語と述語の特称肯定である。例えば「ある人間は走る」－「ある人間は走らない」がそうである。大小対等とは全称肯定と同じ主語と述語である特称肯定、そして全称否定と特称否定である。例えば「全ての人間は走る」－「ある人間は走る」と「いかなる人間も走らない」－「ある人間は走らない」がそうである。矛盾対当とは全称肯定と同じ主語と述語である特称否定である。例えば「全ての人間が走る」－「ある人間は走らない」がそうである。同様に、全称否定と特称肯定は反対対当である。「いかなる人間も走らない」－「ある人間は走る」がそうである。このことは図によって明らかである³。

反対対当の性質はもし一方が真ならば、他方は偽である。しかし逆は成り立たない。なぜなら両方が偽であり得るが、両方が真であることは決してないからである。小反対対当(*subcontrarie*)の性質はもし一方が偽であるならば、もう一方は真である。しかし、逆は成り立たない。なぜなら両方が真であり得るが、両方が偽であることはないからである。*subcontrarie*は反対対当の下に含まれる(*continentur sub contrariis ipsis*)ものと言われる。以前に考察されたように、反対対当は両方が偽であり得る。大小対当(*subalterne*)の性質はもし全称命題が真ならば、特称も真である。しかし逆は成り立たない。*subalterne*はそれによって他のものに従属し(*subalternatur*)交換されるものと言われる。矛盾対当(*contradictorie*)の性質はもし一方が真ならば、他方は偽であり、その逆も成り立つ。*contradictorie*はそれによって完全に反駁される(*contradicunt*)、つまり矛盾する(*repugnant*)ものと言われる。

偶有的内容についての命題とはそれにおいて述語が主語に偶有的に内属するような命題のことである。例えば「人間は走る」や「人間は白い」がそうである。本性的内容についての命題とはそれにおいて述語が主語に本性的に内属するような命題のことである。例えば「人間は動物である」がそうである。疎遠的内容についての命題とはそれにおいて述語が主語に本性的に内属しないような命題のことである。例えば「人間は口バである」がそうである。

同様に、両方の項辞を逆の順序で共有する命題の内あるものは単純换位によって(*per simplicem conversio*)换位される。例えば全称否定と特

³底本注: *deest in nostro codice*.

称肯定がそうである。述語が主語になり、主語が述語になり、質と量が同じままであるような時に単純换位である。例えば「いかなる人間も石ではない」と「いかなる石も人間ではない」、「ある人間は動物である」と「ある動物は人間である」がそうである。simplex(単純[换位])はあたかも sine plica のようにそれによって媒介なしに結論が導出されるものと言われる。

あるものは偶有性によって换位される。述語が主語となり、主語が述語になり、質は同じままで量が変化するような時に偶有性による换位である。偶有性による换位によって全称肯定が特称肯定に换位される。例えば「全ての人間は動物である」→「ある動物は人間である」がそうである。

あるものは矛盾対当によって换位される。述語が主語となり、質と量は同じままである、しかし諸項辞は限定と不定で変化するような時に偶有性による换位である。この换位によって全称肯定と特称否定が换位される。全称肯定は次のように换位される、「全ての人間は動物である、それゆえ全ての非人間は非動物である」。特称否定は次のように换位される、「ある動物は人間ではない、それゆえある非人間は非動物である」。矛盾対当による换位は限定項辞が反対の仕方で不定項辞を表示作用するものとも言われる。

論証について

項辞とはなんであるか、名辞とは何であるか、それらの諸部分とは何であるかを考察せよ。論拠とは何であるか、論証とは何であるかを考察すべきである。論証と言表による論拠の展開である。つまり、論証とは論拠を展開する言表のことである。すなわち、論拠を明らかにする言表である。例えば「人間が走る、それゆえ動物が走る」がそうである。論拠とは疑わしい物事に関して信念、つまり疑わしい物事に関しての信じることの容易さを作り出す言表のことである⁴。論証の内であるものは三段論法である。三段論法とはそれにおいて措定されたものと措定されたものから是認されたものによって何かが生じるようなもののことである。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は実体である
全ての人間は動物である
それゆえ全ての人間は実体である」

sillogistica(三段論法)は[ラテン語で]‘con’である[ギリシア語の]‘sin’と[ラテン語で]‘ratio’である[ギリシア語の]‘logos’、あるいは[ラテン語で]ratioである[ギリシア語の]‘lexis’からそのように呼ばれる。それゆえ sillogismus は

⁴底本では以下の文が続くが削除して訳出する。supple: si sit dubia; dubii vero aptitudinem importat.

conratiocinatioと同様の意味である。「措定されたもの」はこれによって諸命題が複数でも多義的でもなく、一義的であるべきであることが言われている。「措定された」はこれによって諸命題が省略されたものではなく[明示的に]措定されたものであり、格と式において配置されたものであるべきであることが言われている。「措定されたものから～云々」はこれによって結論が前提のいずれかのものとは異なるものでなければならず、諸前提が結論の原因でなければならないことを言っている。

[論証の内]あるものは帰納(inductio)であり、帰納とはそれにおいて十分な量の個別のことどもからその普遍へと前進することである。例えば次のものがそうである。

「ソクラテスは走る、プラトンは走る、かつ個々の人間について同様である
それゆえ、全ての人間は走る」

帰納はそれによって全ての特殊な物事とその物事の普遍へと導かれるものと言われる。

[論証の内]あるものは例示法(exemplum)であり、例示法とは一つの類似したものから一つの類似したものへと前進することである。例えば次のものがそうである。

「この者たちは何らかの窃盗のためにいた⁵
しかし、一人の者は有罪判決を受ける
それゆえ、残りの者もそうである」

exemplumはextra amplum、つまり類似したもののように言われる。

[論証の内]あるものは省略三段論法(entimema)であり、省略三段論法とはある命題が精神の内では補われるもののことである。例えば次のものがそうである。

「全ての動物は実体である
それゆえ、全ての人間は実体である」

命題「全ての人間は動物である」が補われている。entimemaは[ラテン語で] inである[ギリシア語]‘en’と[ラテン語で] mensである[ギリシア語]‘time’に由来してそのように言われる。entimemaはargumentatio mentalis(精神による論証)と同様の意味である。

三段論法について

三段論法とはそれにおいて措定されたもの(quibusdam positis)と措定されたものから是認されたものによって何かが生じるような言表のことである。‘quibusdam’は多義的ではなく一義的だということである。「措定さ

⁵底本ではinterが付加されているが、interを付加せず訳出する。

れた」(positis)は式と格において配置されている(dispositis)ということである。ここで語における全ての誤謬が排除されている。ここで「何かが生じる」と言うことによって全ての誤謬が排除されている。

三段論法はconである'sin'に由来して云々。

格とは類似した自然的事物のために使われるべき諸項辞の配置のことである。式とは質と量の配置のために使われるべき諸命題の配置のことである。各々の格は次の句から明らかである。

第一格は前と後、第二格は前と前で第三格は後と後⁶

様々な式が還元されるところの三段論法と式の形成は次の詩句によって憶えることが出来る。

BARBARA CELARENT DARI FERIO BARALIPTON
CELSNTES DABITIS FAPESMO PRISESOMORUM
CESARE CAMBESTRES FESTINO BAROCO FARAPTI
FELAPTO DISAMIS DAISI BOCARDO FERISO

Aは全称肯定を表し、Eは全称否定を表す、Iは特称肯定を表し、Oは特称否定を表す。Pは偶有性による換位を表し、Sは単純換位を表す。Rは不可能による還元を表す。全ての他の格式は四つの文字B,C,D,Fが表す第一格の四つの式へと還元される。これら四つの式は直接に結論づける。つまり大前提の述語は結論の述語である。最後の五つの式は間接的に結論づける。つまり大前提の述語が結論の主語となる。第二格の第四式と第三格の第五式は不可能による換位によって第一格第一式へと還元される。結論の矛盾が換位されるところの三段論法の前提となり、前提の矛盾が結論となる時が不可能による換位である。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
ある石は動物ではない
それゆえ、ある石は人間ではない」

次のように結論の矛盾が利用される。

「全ての石は人間である
全ての人間は動物である
それゆえ、全ての石は動物である」

同様に大前提の矛盾対当が結論となり、結論の矛盾対当が大前提となる時は不可能による還元である。第三格第五式において明らかである。例えば次のものがそうである。

「ある人間は石ではない
全ての人間は笑うことが出来るものである

⁶大前提と小前提における中名辞の繫辞との相対位置を表している。

それゆえ、ある笑うことが出来るものは石ではない」

次のように[還元される。]

「全ての笑うことが出来るものは石である
全ての人間は笑うことが出来るものである
それゆえ、全ての人間は石である」

第一格は全称、特称、肯定、否定を結論づけるものと言われる。第二格は第一格は全称、特称、否定[を結論づけるものと言われる]。第三格は特称、肯定、否定[を結論づけるものと言われる]。同様に、大名辞が結論となる時は直接的な結論である。小名辞が大名辞の述語になる時は間接的な結論である。大名辞とは大前提において述語であるものであるということと、小名辞とは小前提において主語であるものであることも知るべきである。

特称命題のみ、あるいは不定命題のみからは三段論法でいかなる結論も導かれないことを知るべきである。このことは明らかである。

II ロクスについて

ロクス(locus)とはテミスティウスが言うように議論の土台である。つまりロクスとはそれにおいて論拠の力を与えるところの[論拠の]強さのことである。locusは[場所(locus)との]何らかの類似性に由来してそのように呼ばれる。我々が何かを批判する際にそのものが明らかになると思うような場所(locum)へと立ち戻ると同様に、もし論拠を明らかにしたいと望むのならば、我々は豊富に論拠を与える⁷ところの格率あるいは格率の種差へと立ち戻る。格率とは次のような共通的な規則のことである。

何かに対して種が述語となるならば、類も述語となる

格率の種差とは類の種に対する関係、あるいは種の類に対する関係、あるいはある単純要素と別の単純要素との関係のことである。単純要素(simplicia principia)とは以下の項辞: 類、種、種差、固有性、偶有性を表示作用するもののことである。

ロクスの内であるものは格率であり、あるものは格率の種差であることに注意せよ。格率の種差であるロクスの中で、あるものは内属するものあるいは内的なものであり、あるものは内属しないものあるいは外的なものであり、あるものは中間的なものである。内的なロクスの内であるものは実体からであり、あるものは実体に付随するものからである。実体からのロクスの内であるものは定義からあるいは定義であり、あるものは説明規定からあるいは説明規定であり、あるものは名辞の説明からあるいは[名辞の]説明である。

⁷argumentemurと読んで訳出する。

定義からのロクスには四つの規則が含まれる。例えば「ソクラテスは理性的で可死的な動物である。それゆえ、ソクラテスは人間である」がそうである。次の規則が成り立つ。

何かに対して定義が述語になるならば、被定義項も述語になる

同様に、「石は理性的で可死的な動物ではない。それゆえ、人間ではない」も成り立つ。次の規則が成り立つ。

何かから定義が除外されるならば、被定義項も除外される

同様に、「理性的で可死的な動物がいる。それゆえ、人間がいる」も成り立つ。

何であれ定義の述語であるならば、被定義項の述語である

否定についても同様である。

逆の順序での定義からのロクスには四つの規則が含まれる。例えば「ソクラテスは人間である。それゆえ、ソクラテスは理性的で可死的な動物である」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何かに対して被定義項が述語になるならば、定義も述語になる

他のものは先に述べたことから従う。

説明規定からのロクスは四つの規則を含む。例えば「ソクラテスは笑うことと歩くことが出来る二本足の穏和な本性の動物である。それゆえ、ソクラテスは人間である」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何かに対して説明規定が述語になるならば、被説明規定項も述語になる

同様に、「牛は笑うことと歩くことが出来る二本足の穏和な本性の動物ではない。それゆえ、牛は動物ではない」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何かから説明規定が除外されるならば、被説明規定項も除外される

同様に、「笑うことが出来る～云々な動物がいる。それゆえ、人間がいる」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何であれ説明規定の述語であるならば、被説明規定項の述語である

同様に、「笑うことが出来る～云々な動物がいない。それゆえ、人間がいない」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何であれ説明規定から除外されるならば、被説明規定項からも除外される

同様に、逆の順序での説明規定からのロクスも同様に[説明される。]

名辞の説明からのロクスには四つの規則が含まれる。例えば「ソクラテスは知を愛する者である。それゆえ、ソクラテスは哲学者である」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

名辞の説明に関する何かが述語であるならば、被説明項に関する何かも述語である

同様に、「知を愛する者は愚かではない。それゆえ、哲学者は愚かではない」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何であれ名辞の説明の述語であるならば、被説明項の述語である

否定の場合は「ソクラテスは知恵を愛する者ではない。それゆえ、ソクラテスは哲学者ではない」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何らかの名辞の説明であるものが除外されるならば、被説明項も除外される

同様に、「知恵を愛する者は徳のある者である。それゆえ、哲学者は徳のある者である」が成り立つ。次の規則が成り立つ。

何かが名辞の説明規定の述語であるならば、被説明項の述語でもある

これらの規則は[名辞の]説明規定に関して理解される。

実体に付随するものからのロクスの内であるものは部分からであり、あるものは原因からであり、あるものは生成からであり、あるものは消滅からであり、あるものは使用からであり、あるものは関連する偶有性からである。

全体からのロクスの内であるものは普遍的全体(toto universali)からであり、あるものは構成的全体からであり、あるものは量における全体からであり、あるものは様態における全体からであり、あるものは位置における全体からであり、あるものは時間における全体からである。

普遍的全体からのロクスは例えば〈欠落〉その部分は常には破壊的とならなければならない。普遍的全体からのロクスは広義の類からのロクスとも言われる。

構成的全体からのロクスは例えば「家がある。それゆえ、天井がある」がそうである。次の規則が成り立つ。

構成的全体が存在するならば、その構成的部分も存在する

量における全体からのロクスは例えば「全ての人間は走る。それゆえ、ある人間は走る」がそうである。次の規則が成り立つ。

何であれ量における全体に適合するものは部分にも適合する

様態における全体からのロクスは例えば「ある仕方で(aliquoliter)走らない。それゆえ、走らない」がそうである。次の規則が成り立つ。

何であれ様相における全体から除外されるならば、同じものから部分が除外される

場所における全体からのロクスは例えば「神は遍在する。それゆえ、ここにもいる」がそうである。次の規則が成り立つ。

何であれ場所における全体に適合するならば、そのある部分にも適合する

時間における全体からのロクスは例えば「神は常に存在する。それゆえ、神は今存在する」がそうである。次の規則が成り立つ。

何であれ時間における全体に適合するならば、そのある部分にも適合する

同様に、部分からのロクス(欠落)あるものは普遍的部分から[のロクス]であり例えば「ソクラテスは走る。それゆえ、ソクラテスは移動する」がそうである。次の規則が成り立つ。

何かに対して普遍的部分が述語となるならば、普遍的全体も述語となる

普遍的部分からのロクスは種からのロクスとも呼ばれる。

実体についての部分からのロクスとは例えば「ソクラテスは走る。それゆえ、ソクラテスは移動する」がそうである⁸。次の規則が成り立つ。

実体についての部分についての何かが述語であるならば、その全体についての何かも述語である⁹

構成的部分からのロクスは例えば「壁がない。それゆえ、家がない」がそうである。次の規則が成り立つ。

構成的部分が存在しないならば、その全体も存在しない

量における部分からのロクスとは例えば「何らかの人間が走らない。それゆえ、全ての人間が走らない」がそうである。次の規則が成り立つ。

何であれ量における部分から除外されるならば、全体からも除外される

様態における部分からのロクスは例えば「うまく走る。それゆえ、ある仕方でする」がそうである。次の規則が成り立つ。

⁸底本では普遍的部分からのロクスの直後に実体についての部分からのロクスの説明が二度書かれているが最初の説明を削除して訳出する。最初の説明と二つ目の説明は例は同じであり、最初の説明の規則は普遍的部分からのロクスの規則と同じになっている。

⁹est parsを削除して訳出する。

何であれ様態における部分においてあるならば、全体においてもある

場所における部分からのロクスは例えば「ソクラテスはここにはいない。それゆえ、ソクラテスはどこにもいない」がそうである。次の規則が成り立つ。

何かから場所における部分が除外されるならば、全体からも除外される

時間における部分からのロクスは例えば「ソクラテスは今にいない。それゆえ、ソクラテスは常にいない」がそうである。次の規則が成り立つ。

何かから時間における部分が除外されるならば、時間における全体からも除外される

原因からのロクスが分割される。あるものは質料因からのロクスである。例えば「この人は鉄を持っていない。それゆえ、この人は鉄の道具を持っていない」がそうである。次の規則が成り立つ。

質料因が欠如している時、その質量も欠如している

質量を存続するものとも言う。

[原因からのロクスの内] あるものは形相因からのロクスである。例えば「ソクラテスには翼がない。それゆえ、ソクラテスは飛ぶことが出来ない」がそうである。次の規則が成り立つ。

形相因が欠如している時、その作用も欠如している

[原因からのロクスの内] あるものは作用因からのロクスである。例えば「そのナイフの形(formam)を作る者(efficiens)であるところの製作者は善い(優れている)。それゆえ、その者から作られたところのナイフは善い」がそうである。次の規則が成り立つ。

その作用が善いものであるならば、そのもの自体も善いものである

[原因からのロクスの内] あるものは目的因からのロクスである。例えば「」がそうである。次の規則が成り立つ。

その目的が善いものであるならば、そのもの自体も善いものである

生成からのロクスは例えば「この家の生成は善い。それゆえ、そのもの自体も善いものである」がそうである。次の規則が成り立つ。

その生成が善いものであるならば、そのもの自体も善いものである

消滅からのロクスとは例えば「その人間の消滅が善いことである。それゆえ、その人は悪しき人である」がそうである。次の規則が成り立つ。

その消滅が善いものであるならば、そのものの自体は悪しきものである。そしてその逆も成り立つ

使用からのロクスとは例えば「使用する限りで馬に乗ることは馬の善さである。それゆえ、そのような使用を保持する限りで馬は善いものである」がそうである。次の規則が成り立つ。

その使用が善いものであるならば、使用する限りでそのものの自体は善いものである。

関連する偶有性からのロクスとは例えば「地に雨が降った。それゆえ、地面は湿っている」がそうである。次の規則が成り立つ。

関連する偶有性の一方が属するならば、他方も同じものに適合する

外的なロクスの内であるものはより大きなものからのロクスである。例えば「王がその城を攻略することが出来ない。それゆえ、兵卒も攻略することが出来ない」がそうである。次の規則が成り立つ。

もしより大きなものに内属すると思われるものが内属しないならば、より小さなものに内属すると思われるものもない属しないであろう

より小さいものからのロクスとは例えば「兵卒が終わらせることが出来る。それゆえ、王も終わらせることが出来る」がそうである。次の規則が成り立つ。

もしより小さなものに内属すると思われるものが内属するならば、より大きなものに内属すると思われるものも内属するであろう

類似からのロクスとは例えば「笑うことが出来ることが人間の固有性であることと同様に、嘶くことが出来ることがロバの固有性である」がそうである。次の規則が成り立つ。

類似したものに対しては判断は同じである

類比からのロクスとは例えば「船における船長は国家における指導者である。しかし船において[船長は]籤によってではなく技術によって選ばれるべきである。それゆえ、国家においても同様である」がそうである。次の規則が成り立つ。

類似した類比するものに対しては判断は同じである

転用(transsumptione)からのロクスとは例えば「マルクスが走る。それゆえ、トゥッリウスが走る」がそうである¹⁰。次の規則が成り立つ。

転用されるところの音声から転用するところの音声理解される

¹⁰マルクス・トゥッリウス・キケローのことを言っているので同じ人物に言及している。

反対のものからのロクスの内であるものは直接に反対対立する反対であるものからのロクスである。例えば「ソクラテスは白い。それゆえ、ソクラテスは黒くない」がそうである。次の規則が成り立つ。

もし何かに対して反対であるものの内で一方の反対対立であるものが属しているならば、同じものからもう一方のものが除外される

[反対のものからのロクスの内で]あるものは直接に反対であるものからのロクスである。例えば「ソクラテスは健康ではない。それゆえ、ソクラテスは病気である」がそうである。次の規則が成り立つ。

もし何かに対して直接に反対であるものの内で一方が除外されるならば、もう一方のものは属する

[反対のものからのロクスの内で]あるものは反対であるものの欠如からのロクスである。例えば「ソクラテスはプラトンの父である。それゆえ、ソクラテスはプラトンの息子ではない」がそうである。次の規則が成り立つ。

反対であるものの欠如に関して一方が属するのならば、同じものに関してそのものから他方が除外される

[反対のものからのロクスの内で]あるものは反対の関係からのロクスである。例えば「ソクラテスは盲目である。それゆえ、ソクラテスは見る者ではない」がそうである。次の規則が成り立つ。

もし反対の関係においてあるものに一方が属するならば、同じものに関してそのものから他方が除外される

[反対のものからのロクスの内で]あるものは矛盾対立する反対であるものからのロクスである。ここでは肯定と否定による矛盾対立のことを言っている。例えば「君が座っていることは真である。それゆえ、君が座っていないことは偽である」がそうである。次の規則が成り立つ。

もし矛盾対立する反対であるものの内で一方が真であるならば、もう一方は偽である

[外的なロクスの内で]あるものは権威からのロクスである。例えば「アリストテレスはこのように言った。そして彼が知者であるのでそのことは真である」がそうである。次の規則が成り立つ。

知者であることによって信じられるべきである

[外的なロクスの内で]あるものは部分からのロクスである。部分からのロクスは一部の外的なロクスを含んでいる。類似からのロクスは一部の内的なロクスを含んでいる。

中間的なロクスの内であるものは格からのロクスである。例えば「正しく(juste)支配するならば善く(bene)支配する。それゆえ、正しいも

の(quod justum)は善いもの([quod] bonum est)である」がそうである。次の規則が成り立つ。

[ある]格が[ある]格の述語であるならば、格変化したものは格変化したものの述語である

[中間的なロクスの内で]あるものは活用からのロクスである。例えば「白いもの(album)がある。それゆえ、白さ(albedo)がある」がそうである。次の規則が成り立つ。

活用において説明規定は同一である

[中間的なロクスの内で]あるものは分離からのロクスである。例えば「ソクラテスが走るか(vel)プラトンが走る。ソクラテスは走らない。それゆえ、プラトンが走る」がそうである。次の規則が成り立つ。

分離における反対であるものについて、一方が属しないならば他方が属する